

金持の貧乏か、貧乏の金持か 「清貧の思想」の読後感

(中野孝次氏、平成十六年没、享年七九歳)

一、清貧とは

広辞苑——行いが清らかで私欲がなく、そのために貧しく暮らしていること

中野孝次——現世での生存は能うかぎり簡素にして心を風雅の世界に遊ばせることを、人間の最も高尚な生き方とする文化の伝統があった。これこそが日本の最も誇りうる文化であると信じる。今もこの清貧を尊ぶ思想は我々のなかにあって、物質万能の風潮に対抗している。(まえがきより)

伊藤肇——

現財界で夙に清貧な生活ぶりで有名な土光敏夫、中山素平を評した文より抜粋(現代の帝王学、人間的魅力の研究)

土光敏夫(収入よりも質素な生活を送れば、金が残るのは、自明の理だが、土光はその金をあらいざらい橘女子学園につき込んでいる。母親、登美がのこしていった女子短大だ。)

「元来、わたしは最低生活をするのを信条としているから、月給が安かろうと、ボーナスが少なかりょうと、あまり気にかからなかった。どんなに質素な生活でも自分の仕事に打ち込んでおれば、味気ないということは絶対にないよ。」

岩田武夫の土光評「貧乏人でも目標を持ち満足している人間は金持ち、¹それも非常な金持ちだ。大金持ちでも、いつ貧乏になるかとびくびくしている人間は冬枯れのようなものだ云云」

中山素平(対談の折、最後の海軍大臣米内光政の清貧ぶりについて語った文より抜粋)

「どうも、君は僕のことを貧乏だ、貧乏だ、といたり、書いたりするくせがある。」

「清貧を強調するわけではないけど、経営者でも銅臭芬芬というのは頂けませんね。同じ貧乏でも、その人に徳があれば清貧となり、徳がなければ赤貧となります。いくら粗末な着物をきて、洗い髪を束ねても、美人はやはり美人なんです。云云」

「清貧の原理みたいなものがあるのですか。」

「貧乏羞ズルニ足ラズ。羞ズベキハ是レ貧ニシテ志ナキナリ。」

財モニクムニ足ラズ。ニクムベキハ是レ財ニシテ能ナキナリ。」

老モ歎ズるに足ラズ。歎ズベキハ是レ老イテ空シク生キルナリ。」

加藤廣—基本的に清貧はありえないと思ってます。

清貧というのは豊かなひと清くいきろという意味ではないのですか。それなら「清富」といふべきです。お金があっても使うときには、社会に役立つようにきれいに使うことです。



二. 「清貧の思想」の紹介

本阿弥光悦、鴨長明、良寛禅師、池大雅、与謝蕪村、橘曙覧、吉田兼好、松尾芭蕉、西行法師らが生活を簡素化し心の豊かさを求めたありさまを紹介している。清貧とは、単なる貧乏ではない。自らの意思と行動によつて作り出した簡素な生活である。庭園、住まい、山水画、雅楽、和歌、俳句などに見られる先人の豊かな感性は、自然と同化することにより、自らを解放した時に始めて真の自己を表現している。脱離、脱俗が、肝心である。

右の中から、二例ほど紹介する。

鴨長明—(平安末期から鎌倉初期)京都、下鴨神社の神官の出で、若くして和歌、琵琶等に才能を発揮したが、五十歳にして、全ての要職を捨て、突然出家遁世した。洛北に方丈庵を結び、五八歳の時に方丈記を記した。心の安らかさが最も大切と書いていて、悟道に至らず、世間と人間への関心を捨てきれない面が垣間見える、という。方丈庵を僧侶の修行の場としたのではなく、数寄の心を持った、数寄者(すきしや)の嗜みの場として六二歳の生涯を終えるまで過ごした。現世の栄誉利得と離れて別乾坤に遊ぶころは、極楽に近いと信じていた。

橘曙覧「独楽吟」

岩波文庫版橘曙覧歌集所収の「独楽吟」全52首は次のとおり。

たのしみは神のいほりの蓮敷ひとりこゝろを静めるとき
たのしみはすびつのもとにうち倒れゆすり起すも知らで寐し時
たのしみは珍しき書人にかり始め一ひらひろげたる時
たのしみは紙をひろげてとる筆の思ひの外に能くかけし時
たのしみは百日ひねれど成らぬ鬘のふとおもしろく出きぬる時
たのしみは妻子むつまじくうちつどひ頭ならべて物をくふ時
たのしみは物をかゝせて善き値惜みげもなく人のくれし時
たのしみは空暖かにうち晴し春秋の日に出でありく時
たのしみは朝おきいで昨日まで無し花咲ける見る時
たのしみは心にうかぶはかなごと思ひつゞけて煙紳すふとき
たのしみは意にかなふ山水のあたりしづかに見てありくとき
たのしみは尋常ならぬ書に置にうちひろげつゝ見もてゆく時
たのしみは常に見なれぬ鳥の来て軒遠からぬ樹に鳴しとき
たのしみはあき米櫃に米いでき今一月はよしといふとき
たのしみは物識人に稀にあひて古しへ今を語りあふとき
たのしみは門売りありく魚買て煮る鱈の香を鼻に嗅ぐ時
たのしみはまれに魚煮て児等皆がうまいうましといひて食ふ時
たのしみはそゞろ腕ゆく書の中に我とひとしき人をみし時
たのしみは雪ふるよさり酒の糟あぶりて食て火にあたる時
たのしみは書よみ倦るをりしもあれ声知る人の門たゞく時
たのしみは銭なくなりてわびをるに人の来りて銭くれし時

橘曙覧（たちばなのあけみ）——（幕末の歌人、国学者）福井の商家に生れ、二歳で母、十五歳で父と死別、二八歳で家督を弟に譲り隠遁。清貧に甘んじつつ精進。藩主松平春嶽が家老中根雪江を通じ仕官を求めたが、固辞。明治に入り、正岡子規に絶賛され、文学史にその名を残す。「独楽吟」は、「たのしみは——」に始り、「一時」で終わる和歌五二首をのせている。（資料2参照）貧乏生活の中で生きる喜びの一瞬を詠んだものが多く、現代の我々にも通じる歌ばかりである。松平春嶽が、橘曙覧の陋屋を訪ねた時の描写が面白い。その貧しさと、きたなきには、辟易しつつも、心の高雅さに感服した。高貴の身の自分のほうが高樓に住めども、どんなに「心は寒く貧しく」劣っているかと気づいたと、ある。

尚、「独楽吟」の一首が、今上天皇、皇后両陛下の米国訪問の際に、クリントン大統領によりその歓迎演説（平成六年六月一三日）に引用されたことを銘記したい。

たのしみは 朝起き出でて 昨日まで 無かりし花の 咲ける見る時

我唯足知（われたただたるをしる）
 京都の竜安寺に徳川光圀が寄進したとされる、石造りの手水鉢がある。その手水鉢の上面に彫られている「知足」の心を表した言葉。

【う】歌よむ達人 橋 曙覧(たちばなのあけみ)



江戸時代の歌人橋曙覧(たちばなのあけみ)。名声を求めず、心豊かに歌や書の風雅の世界に生きました。

歌集「独楽吟(どくらくぎん)」は特に有名で、1994年に天皇・皇后両陛下が訪米された際、当時のクリントン大統領がその中の一詩「たのしみは 朝おきいでて 昨日まで 無かりし花の 咲ける見る時」を引用し、大きな話題になりました。

足ることを知らば貧といへども富と名づくべし、財ありとも欲多ければこれを貧と名づく (源信、往生要集、九八五年)



村田の感想

清貧の思想を限定的に考えずとも（隠遁、脱俗）、土光、中山さんの生活スタイル（生活は質素だが志は崇高）を含めて考えるなら、多いに共鳴出来るし、こころある日本人が、こぞって賛同し大事にしたい日本文化の一側面といえるだろう。清富とは、些か異なるものであろう。何故なら、名誉欲、利得、物欲から脱却し

ない限り、(リクルートの未公開株や村上ファンドのような) 隠微な誘惑には勝てないだろう。

社会や、国家のリーダーが、清貧の思想の真髄を体得して、これを持って社会や国をリードしてくれるのは有難いが、GDPの六割が個人消費の国で、今後の年金、財政が国の経済の成長に大きく依存するとなるなら、はて如何したものか。清貧か大量消費か。